

# 講演会 & ライブ な日々 ③①

古川 秀明

## 『SC・SSW・養護教諭による新しい学校内対人援助システム物語』

### 第五話・実践経過Ⅱ（2月の続き）

#### 【チーム学校によるオープンダイアログの導入】

- 一向に酒をやめる気配のない父親、このままではどんな不幸な結果になるか分からないし、あきこの状態も悪く、虐待通告をしないといけない状況。
- カウンセラーの面接だけでは難しいので、チーム学校としてこの家族を支えたいと両親に提案したところ、両親とも是非そうして欲しいと承諾を得た。
- 関係者会議の開催と守秘義務の解除、SCとSSWによるオープンダイアログを提案すると、それも承諾してもらえた。

#### 【学校の方向性】

- 両親の承諾を得て、チーム学校での関係者会議を定期的に行う。
- 主なメンバーは校長、あきこの担任、養護教諭、SC、SSW。
- 今後の面接はSCとSSWが責任者となりチームを組み、家族療法（オープンダイアログの技法を使う）にて対応。
- 各関係機関との連携はSSWが担う。
- 面接の中で緊急事態等が発覚した場合は、直ちに校長に報告し、その判断に従う。

#### 【SC、SSWと全家族面接の経過】

- 果てしない夫婦の水掛け論に、子ども達はうんざり。

- 子ども達は別居か離婚を強く要望したが、父親は家族がバラバラになることに、母親は経済的な理由から聞き入れない。
- 何度も根気よく対話を続ける（不確実性への忍耐）
- かなり過酷な面接だった。（怒鳴る妻、かわす夫）

#### 【父親は酒をやめることに強く抵抗】

→ここは SC、SSW 共に深く父に共感し、父親に深く同情した。

→もしお酒に強い拒否反応を持つ援助者であれば、倫理、道徳観を父親に押し付け、失敗していたかもしれない。

SSWは父親に、SCは母親に寄り添う。

- 子ども達は日々の辛さを切々と語り、面接を重ねる間に妻のうつの症状が悪化。

→SC と SSW の励ましもあり、ある日、ついに父親が酒をやめることを決断。

#### SSW の動き①〔外部連携〕

- K 市家庭支援センター(U 児童相談所内に併設)の K 相談員（虐待対応、DV 対応）と面談。
- 本事例は、父のアルコール依存に伴う大声や暴言により家族が疲弊していることから、児童への心理的虐待と DV の両面の対策が必要となる。
- DV に関しては、母親が身の危険や限界を感じた時の、緊急連絡先の電話番号と所在地を母親に知らせておく。
- 緊急の時は、母親の実家（隣町）に逃げるか、K 市家庭支援総合センターまたは地域の民間シェルターを利用するようアドバイスする。
- 本事例に関して、弁護士や警察との連携も視野に入れ、家庭支援センターも協力する。
- 万が一母親が実家に逃げた場合は、校区外でもあるので妹の校区外通学も視野にいれ、教育委員会と連携する。

#### SSW の動き②〔父親支援〕

- 父親を責めるばかりではなく、支援することも実施。
- SC の面接は予約が詰まっており、オープンダイアログの流れで、SSW による父親支援開始。
- SSW は父親の父親と年齢が同じで、ちょうど父と息子くらいの関係となり、孤立していた父親のよき相談者となる。
- 医療機関や児童相談所、保健所との連携は全て SSW が引き受け、その度に父親に丁寧に説明し、そのおかげで父親も抵抗なく外部援助を受け入れた。

- アルコールに関しては、WHO のアルコール依存症スクリーニングを活用し、依存症の度合いを調べる。
- その結果、**父親よりも SSW のほうが、飲酒量が多いことが判明！！！！**
- ちなみに SC も SSW と飲酒量が変わらなかったのも、酒の量と依存症の相関関係について、父親、SSW、SC で爆笑、激論のオープンダイアログとなる。  
→3 人とも、もしここが居酒屋だったらどんなに楽しいだろうと思った。
- 年齢的には、SSW が父親の父親、SC が父親の兄といった感じになった。
- SSW が NPO 法人 ASK の HP から「多岐にわたるアルコール関連問題」をダウンロードし、資料にある 10 項目の解説の中からひとつを選び、その感想・意見を書いてくるといふ「宿題」を父親に提示。
- 翌週、その宿題を読みながら、父親と SSW で話し合った。

その結果、父親が以下のことに合意した。

- ① 子ども達が成長し、例えば結婚式で楽しく「祝い酒」を飲むことを目標に、それまでは「禁酒」すること。
- ② そのために、アルコール依存症を治療する。
- ③ 治療のために、専門医の診察を受ける。

#### 医療機関との連携

- SSW が H 医院の PSW と連携。
- その結果、SSW の仲介により、PSW と SC も連携できた。
- PSW 「来院時にしっかりと本人（父親）に動機づけができていました。アルコール依存症の人が、自らの意思で治療を受けに来ることはまずありません。（ほとんどが家族や親戚に強制的に来させられている）ここまで本人の動機付けが出来ているケースは初めてなので医師も驚いてました。本人によると、学校での SSW や SC との面接が、断酒の決意を固めさせてくれたと語ってました。凄いですね」  
→SC と SSW は心の中でガッツポーズ！
- 参考までにどんな技法を使ったのかを聞かれたので、オープンダイアログを説明。
- PSW もその存在を知っており、今後も連携することを約束。

#### 治療の経過

- 父親は毎回必ず、休まず治療を受け、投薬も続けた。
- その結果、断酒が成功。

- 断酒の効果はすぐに表れ、父親の暴言や物を壊したりする行動がなくなった。
- 断酒後も父親と SSW の面接は続行（SCが入れる時は SC も入る）
- その度に SSW と SC で父親の断酒続行を心の底から褒めて認めて尊敬した。
- なぜなら、SSW も SC も断酒できないから(笑)
- 断酒後 3 か月で父親が血液検査の結果を持ってくる。
- 見事にアルコール反応が消えていた。

#### 家族の動き

- 父親の断酒とともに、まさしの不登校は改善。ほぼ毎日通学し、体重も元に戻りつつある。
- あきこの妄想、幻聴が消える。
- あきこは父親にうまく甘えられるようになり、前から欲しかったスマホを買ってもらい、上機嫌。
- それに伴い、保健室への来室がゼロになる。
- まさしは甘え下手なので、父親はまさしにもゲーム機を買ってやった。
- 母親に関しては、断酒により酒代がかなり浮き、大いに家計が助かると喜んでいたが、夫に関する不信感はぬぐえず、過去の夫の暴言などのフラッシュバックが、断酒後さらに強く出るようになった。
- 母親の主治医とも連携をしつつ、母親のカウンセリングは SC が続行。
- 妻の自分に対する不信感に関して、夫が強い不満を表す。
- せっかく酒をやめたのに、妻の態度が変わらない。
- こんなことならやめるんじゃなかった・・・。
- そこで再び SSW と SC が父親支援に回る。
- 酒をやめることがいかに辛いことかを世界で一番共感できる SSW と SC なので、なんとか支えられた。

#### 「その後の経過」

- 翌年、あきこが中学に入学したため、S 小学校での面接は終了。
- あきこのフォローは中学の SC と連携。現在も幻聴や妄想なし。
- 両親とまさしのカウンセリングは高校で SC が継続。
- 父親は一切酒を飲んでいない（母親とまさしも証言してくれている。飲んだら態度やにおいですぐに分かるらしい）。
- 母親の夫に対する PTSD はなかなか改善せず、夫婦仲も元に戻るということはないが、以前よりは平和な暮らしができています。

- まさしは高校で E スポーツクラブに入り、国体に出場し、団体に2位になり新聞にも掲載された。
- 現在、アルコール依存症やゲーム依存症に興味を持ち、心理学部のある大学を目指して勉強している。
- 成績は良いので、いくつかの指定校推薦は確実に受けることができるらしい。
- ジャニーズに関しては、やはり無理とのこと。

### 【考察】

#### SC から

- 心理の視点だけでは、とても対応できなかったケースと言える。
- 特に、他機関との連携や、校内におけるチームワークは SSW の力無くしては無理だった。
- また、父親に寄りそう丁寧な SSW のケアも効果的だった。
- 父親が断酒を決意するまで、とても緊張感のある長い家族面接だったが、その長く苦しい時間こそ、オープンダイアログの「不確かさへの忍耐」であり、父親自身も、あの時の面接が自分の断酒の考えを固めたと言っている。
- 父親が面接の有効性を認めてくれたのは、SC,SSW の「胸を打つ瞬間」となった。
- 母親の怒鳴り声、父親の丁寧だけれど頑なで冷たい態度、子ども達の絶望した顔・・・
- あのないや～な時間を耐えられたのは、SSW とチームを組んでいたからだと思う。
- どうやってもうまくいかない難しい面接の時ほど、この「チームで対応」するオープンダイアログは有効に働く。
- すぐに解決しなくても、わけが分からなくても、持ちこたえられる力は問題解決の大きなパワーになる。
- このお父さんのお酒のように、どうにも解決できない問題を、宙ぶらりんのままなんとか耐え続けていく力が、オープンダイアログのチームメンバーの中に芽生える。
- インスタントに早く解決したケースはリバウンドも早い。
- このお父さんが、「あの時の辛い面接があったから決断できた」と言っているように、根を張る時間が必要。
- 相談者が根を張っている時間の面接は、たいてい、いや～な空気が漂っていて、援助者はそれをケースの行き詰まりと思って落ち込んだりするが、オープンダイアログではチームで動くので、その耐性があります。
- また、迅速な支援も、SSW がいることで父親面接や他機関との連携が取れ、養護教諭や担任などの校内委員会での報告も、SC がいなくても実現できています

今回のケースにおける、オープンダイアログの7つの基本ルールについて

1. immediate help 迅速な支援

- SC、SSW、養護教諭、担任などのチームの誰かが迅速に対応できた。

2. social network perspective 社会的ネットワーク

- SSW が保健所、児童相談所、医療機関などをつないだ。

3. flexibility and mobility 柔軟性と機動力

- SSW が多職種連携の糸を素早くつないでいった。SSW が 児童相談所出身というのも大きい。

4. responsibility 責任制

- 学校内のチームの誰かが常にこのケースを毎日見守っていた。
- それはコンサルテーションや校内委員会での情報共有がなされていたから。
- またチームで面接するので、閉鎖性がない。

5. psychological continuity ケアの継続性

- あきこが卒業してからも、まさしの高校でフォローアップできている。

6. tolerance of uncertainty 不確実さへの忍耐

- 過酷な面接に耐えきった成果があった。

7. dialogism 対話主義

- 常に家族やチームメンバーと対話してきた。

「最後に」

- このように、医療現場では不可能な、迅速な支援、社会的ネットワーク、柔軟性と機動力、責任制、ケアの継続性、不確実性への忍耐、対話主義この全てが、学校内オープンダイアログでは可能だった。
- オープンダイアログは、新しいスクールカウンセリングの技法として有効であり、チーム学校という考え方の切り札になり得ると思う。
- 最後までお読みくださりありがとうございました。

ふるかわひであき